

「別格な読み聞かせ」

青山 いづみ

柳田邦男先生、はじめまして。

私は、小学校五年生の息子と幼稚園年長の娘をもつ母親です。娘に読み聞かせをするのは楽しいのですが、ある日を境に我が家では、兄が妹に読み聞かせをすることが増えました。

きっかけは、娘が二歳の頃好きだった、かぐくいひろし作の「だるまさんが」の絵本でした。この絵本はお話も短く、だるまさんの表情に愛嬌があつて、読み手の個性によつて、それぞれの面白さがにじみ出る絵本です。私はこの小さな絵本が大好きで、息子の幼いときにも、繰り返し読み

聞かせた大切な一冊です。娘もこの絵本がお気に入りです。私が絵本のだるまさんと同じような表情で読むと大笑いして、「もういっかい」と、繰り返し何度もせがむのでした。

ある日、私が家事をしておりますと、いつものように娘が「だるまさんが」の絵本を持ってやってきました。一度読み始めると、その後何度も繰り返し読むことになるので、「この洗い物が終わったら読もうね」と言いました。娘はすぐに読んでほしかったのでしよう、私の言葉に返事もせず、今度はテレビを見ている兄のところに行き、黙って絵本を差し出しました。すると、息子もこれまた黙って絵本を受け取り、座っていたソファを半分空けて、娘に隣に座るよう促しました。

いつも私が読み聞かせるのをそばで見っていた息

子は、妹が笑ってくれるようにと、私が読むよりもずうっと面白い抑揚と表情で読み始めました。娘は絵本と兄の表情を交互に見ながら、大笑いして喜んでいきます。それ以来、娘は私のところよりも先に兄のところへ絵本を持っていくようになりました。それは、年長さんになった今も、続いています。

娘の通う幼稚園では、お帰りのときに、絵本を読み聞かせてくれます。先生が絵本を選んでくださるので、私や娘が手に取らないような絵本に出合うことができます。また、週末の絵本の貸出日を、娘は毎週楽しみにしていて、「今日は絵本が借りられる日だ！どの絵本にしようかな…カエルが出てくるお話にしようかな。」と、本当に楽しそうに話しています。絵本を借りて帰宅すると、

「やっぱりカエルのお話はやめて、どんぐりの絵本にしたよ。今日、先生が別のどんぐりの絵本を読んできたから、こっちのどんぐりの絵本にしたんだ。」

と、私に絵本を見せてくれます。そして、息子が帰宅すると、

「お兄ちゃん、この絵本借りてきたよ。夜、読んでね。」

と、お願いをします。娘は、自分で読むことのできるのですが、兄に読んでもらう絵本は別格なのでしょう。おもしろい絵本は二人で大笑いし、少し怖い本は兄の側にぴったりくっついて覗く娘。兄妹で一冊の絵本におでこを寄せ合い、一緒に絵本の世界を旅する様子は、母親の私にとって本当に微笑ましく、幸せな気分をもたらしてくれます。

その素敵な読み聞かせの時間のおすそわけが、私にもあります。娘が私に読み聞かせをしてくれることです。息子と同じように抑揚を付けるので、そっくりな兄妹に、ついつい大笑いしてしまいます。そんなかけがえのない時間が愛おしく、娘にとつて兄が読み聞かせが別格なように、娘から私への読み聞かせもまた別格なのです。

いつか子どもたちが、それぞれに家庭をもち、子育てをするようになったら、親から子どもへの読み聞かせはもちろんのこと、子どもが親に読み聞かせてくれる幸せも体験してほしいなあと思っています。

柳田先生、私は今、人生で二度目の絵本との出会いをしています。絵本は親子に幸せな思い出を作ってくれますね。三度目の出会いも、今から楽

しみです。季節の変わり目、柳田先生、どうぞご自愛ください。